

★国際主義の問題について (テーゼ・補) — 七月二十日

今、日本革命にかかわる革命家の前に、一國主義者か、国際主義者かを例外なく問う事態が発生している。長い革命の歴史の中で、カウツキー主義者が常にそうであったように、革命史の現実が、目前に自らをも包摂する力として表現された時、それを、科学性・歴史性を持って対象化しえない結果として、一國主義者は常にブルジョアジエの側に大衆を領導する役割を果たして来たのだ。

ツインメルワイル左派によって引きつがれた国際主義者の普遍的質は、視点を變え、しかし、歴史的な革命の道の中の、同じ様に問うているのだ。

すなわち、抑圧された人民の側に立つという世界史の創造を受け持つ眞の国際主義者の側に立つか、革命的言辭による社会排外主義的認識の庇護の側に立つか？が問われているのである。

域内の「平和」を主張したカウツキー主義者の眼が、実は、階級対立を民族間問題に

すりかえる結果を証明した様に、世界の抑圧された人民との、根底との結合を、革命的言辭ですましてしまい、自らの域内、日本民族的尺度と思考性に無自覚に依拠している現代カウツキー主義者が、革命戦争派を自称する中にまではびこっているという事実を、我々は驚きを持って知った時、この歴史的现实が日本階級闘争の認識論の限界として、必然的に結果している一つの証であることもまた、痛切に知ることが出来た。(この現代カウツキー主義者が無自覚であるがゆえに、眞の革命派に益々全面的に敵対してくるということ忘れてはならない。)

アラブ赤軍・PFLPの世界革命戦線構築にむけた共同武装闘争、テルアビブ攻撃の国際ゲリラ戦を、全面的に認めるのか否か、この選択こそ、国際主義者として世界革命の任務につくのか、よかれ悪しかれ、ブルジョアジエの側に立つのかの岐路であり、よけて通ること、中間的評価を許すこ

とのない、日本の革命家にとつての歴史のメルクマールである。

自称国際主義者が、実は一國主義者であることを証明し、その一國主義的思考を無自覚化させている原因は、以下の三点にあると思われる。

① 世界的な階級闘争史の無知から来る独断による一國主義者への脱落。

歴史的な帝國主義者の分割戦争と、シオニズムによって作りだされた中東の階級闘争史を正確に把握することが要求されている。「イスラエル国家」が存在しているという認識は、すでに国際主義者の失格者である。これは、中国が二つ存在しているという帝國主義者の論理同様、国連という帝國主義者のおしゃべりの場でのみ承認された事実であり、眞実ではない。

一九四八年、国連案としてアメリカ帝國主義者と、ソ連スターリン主義者が共謀してつくりあげた「国家」であり、その国連の「承認」によって、実力でパレスチナ人民

を追い出し、創りあげられたアメリカ帝国主義の軍事基地が「イスラエル国家」であり、中国に表現される「労働者国家」は、イスラエルを国家としてみとめていないし、プロレタリア国際主義者の地図に、二つの中国がない様に、イスラエル国家という地図はない。

一九四八年以前に共存していたユダヤ人とパレスチナ人民の抑圧の上に、シオニストによって作られた占領であり、それを実力で解放する作業は、プロレタリア革命の実践者の任務である。

民族解放社会主義の事業の闘いの中で、敵シオニストが世界帝国主義の主要な軸であり、世界革命の勝利まで闘争が持続するということを明確にしたPFLPの路線が、世界革命統一戦線の第一歩をふみだした同質の闘う部分との共同闘争として、必然的に我々との結合を開始したのであり、この闘争によって、世界の革命派が、世界革命統一戦線の志向性を持って結合を開始していることは、プロレタリア世界革命の巨大な前進である。

ヨロップ、アメリカ等の都市ゲリラ派は、シオニストに明確に革命を妨害されて

いる。今回の闘争に関し「無差別殺人」と認識することから出発する闘争の評価は、すでに、帝国主義者とシオニストたちの土俵の中で、左翼づらをして、おしゃべりをしていることの表現である。

また、「イスラエル国家」の中で重要な帝国主義者の手先として手をつなぐているアラブ・パレスチナブルジョアジーの存在もある。このことは明確に、シオニスト帝国主義者と抑圧されたパレスチナ・アラブ、そしてユダヤ人民の階級闘争であることを物

対していない。

また、「イスラエル国家」の中で重要な帝国主義者の手先として手をつなぐているアラブ・パレスチナブルジョアジーの存在もある。このことは明確に、シオニスト帝国主義者と抑圧されたパレスチナ・アラブ、そしてユダヤ人民の階級闘争であることを物

人民の認めていないイスラエルに行くことではないし、プエルトリコの闘う我々は、PFLPと赤軍によって闘われた闘争を、同胞が殺されたからと、敵対することはない」と言明している。

抑圧された人民が、闘いに行く以外、行く意志を持たない「国」が「イスラエル」だからだ。そのことを、日本の一國主義者はまったく気付かず、プエルトリコ人は貧しい抑圧された民族であり、ユダヤ人はファシストに虐殺された民族であるという、階級性ぬきの、ブルジョアマスコミのニュースから、闘争の評価をおしはかろうとしており、世界の抑圧された人民（民族ではない）に、実は敵対していくのである。

また、日本帝国主義者と、そのマスコミ

語っている。帝国主義者の基地「軍事国家イスラエル」にむけて、最大限の戦いを続行しているのは、当然の、プロレタリアートの使命感である。それゆえ、今迄パレスチナゲリラ、ユダヤ人非合法組織が「イスラエル国」内の人民（？）に被害を与えない闘い方をしていたのに、今回は無差別テロであるというのは、日本帝国主義者の都合の良い論理であって、一九六七年、ゲリラ組織が活動をはじめて以来、今日に至るまで（そして今後もまた、そうするであろうが）、イスラエルが、アラブ人民を理由なく殺しているのと同じ方法で、市バス、スーパーマーケット、映画館、レストラン、ホテルを、連日、破壊しつづけている。戦争が終わったという、シオニストのデマゴグを破壊する雄弁さは、闘いによって、今後も継承されるはずである。

② 帝国主義者に包摂されたマスコミユニエーションメディアに、全面的に依拠していること。(1)の無知は、益々ブルジョアジーのニュースソースを、無自覚に信用するという結果を生む。

これは外からの人民戦争の波を日本革命と相対化させる作業を、益々むずかしくし

月刊
映画批評
 ●10月特大号 450円

編集 足立正生 相倉久人 佐々木守 平岡正明 松田政男

プレヒト 非Aの報道者(ゲタール論補遺)……津村 喬
 都市は国家を超えうるか(フェリーニ論)……千坂泰二
 天使はケチである(第一稿(若松孝二論))……足立正生
 シナリオ「祝祭」(未発表)……若松プロダクション
 しんじおしんじの大追跡(新ヒーロー論)……川本三郎
 テレビジョン(連載)……佐々木守
 やくざ映画(長征への出発(十年間の総括))……西脇英夫
 「運動」の言語と「政治」の言語(批判者への応答)……菅 孝行
 稚子も鳴かずば撃たれまい(大島渚批判)……竹中 芳
 映画の秘やかな息づき(夏の妹(技術論ノート))……原 正孝

編集=東京都文京区本郷2-30-14
映画批評編集室
 発行=東京都文京区本郷2-15-20
新泉社
 振替番号=東京160936番

声明に、いかにこの闘争が、世界の波を作りあげたかが証明されている。彼等の支持とヨーロッパ、アメリカ、ラテンアメリカからの都市ゲリラ派からの支持声明の質とは明確に違いがあるとしても。

空港襲撃は、高度な軍事戦略的な標的であり、そのこの意味を理解しえないならば、帝国主義戦争の論理、パールハーバー攻撃さえ理解しえないだろう。

この闘争を契機として、結果しつつある世界の革命派、ことに先進国のグループとの結合の深さは、日本国内における革命戦争派の闘争による立場の明確さと、相互媒介的に成長していくはずである。

③ 世界の抑圧された人民の側（民族ではない）の情念に立っていない日本の「革命派」の中の一國主義者は、ブチアブルロマン的、自己満足の革命であることを自己暴露している。

（抑圧された側に立っているという事実は、テルアビブ攻撃の雄弁さから、すべてを共有出来るはずである。六月十五日付、新左翼紙、富村順一氏の手紙が、一つのそれを表現している。）

このことはことに、日本革命戦争の現在

が赤軍森一派によって決定的に困難な段階にあり、このことと一重写的に、テルアビブ攻撃をも闇に葬り去ろうとする日本帝国主義者の意図はもろろん、その森一派の責任を痛感するあまりに、赤軍派内部にさえ若干みられる傾向であるが、軽井沢銃撃戦と同次元にテルアビブ襲撃をみようとする軍事力学的視点である。

我々の闘いは、その場所の抑圧された人民の意志を表現し、世界共産主義運動との連関の中で、共産主義政治を軍事的に表現する闘いでなければならぬ。テルアビブ攻撃はまさに抑圧された人民の意志であり、パレスチナ革命にふさわしい戦闘であったのだ。（日本の羽田空港を攻撃するのはわけががうのである。）

そのことは、敵シオニストイスラエルがもつとも痛感したし、闘争の持続と、その波をおそれ、一ヶ月後の七月八日、シオニストの白色テロルは、PFLPの公然組織のリーダー、ガッサン・カナファニーを殺すという個人テロルによる反撃を開始し、連日ベルート内で、そのテロルは、銀行、PLOリサーチセンター襲撃として、人民をおびやかしている。

しかし、敵がそうすればする程、抑圧された人民の血は闘いを要求し、ガッサン・カナファニーの葬式に、奥平、安田同志の写真をかかげたマーチは、六万人の、ユダヤ人を含むレバノンの闘う人民の武装デモとして、ベルート市内を制圧し、アラブでもっとも日和見主義のレバノン政府に、強力なプレッシャーをかけると同時に、抑圧された人民の情念が一つであることを証明している。この情念に連鎖し、共に立つことこそ、日本革命派の、世界の人民との、帝国主義にむけた反撃の一步一步を証していくであろう。

我々アラブ赤軍は、日本の革命派が、世界的、地理的現実をふまえ、共に、更に大胆につきすすむことを、よびかけるものである。また、帝国主義者の手中にある岡本同志を支える運動を闘いとして、日本で表現することを、再びよびかける。

（これは、六月十五日に、日本の同志にあてた「アラブ赤軍からのテーゼ」の補足として書かれたものである。）

★三戦士追悼特集

8・16パレスチナ人民連帯日本二戦士追悼国際集会

三人の戦士が我々に言葉を残した。

「我々は戦争に赴く、絶対に葬列をくり出すな。ただ、祭りを我々と世界革命の友人たちの為に」

全共闘運動の中からパルチザン軍団を先頭に旅立った戦士の群と赤軍派を頂点とした革命の軍事形成への長征の出発。これら革命戦争派の最も突出した質を断固として継承せんとする赤い血によって結ばれた義兄達の集い。8・16パレスチナ人民・インドシナ人民連帯日本二戦士追悼国際集会是京都大学法経一番の大教室を満場の熱気で埋めて開催された。

奥平・安田二戦士、そしてイスラエルの爆弾テロルに倒れた・PFLP中央委員・政治局広報担当員ガッサン・カナハニーを、そして既に戦い半ばに倒れた多くの日本の、世界の革命戦士への黙悼、そして「同志は斃れぬ」の合唱。後につづく義兄弟達の決意と厳肅さに溢れた黙悼と合唱は入場の際

チェックされている報道関係者達にも自発的な起立を促す。

赤軍派代表を始めとして各戦線からの追悼演説は全て「今回の戦いは帝国主義とシオニズムに対する正当なる反撃」であり「これを断固として支持」し「この戦いの地平を引き継ぎ」更なる進撃を組織する」ことを誓った連帯の表明であった。

相模原の米軍戦車輸送阻止闘争の現場から、岡本戦士の鹿兒島大の友人から、岡本救援にイスラエルに向い入国を阻止された弁護士から、警察・右翼暴力・手配師と熾烈な闘いを続ける釜ヶ崎の労働者から、そして多くの戦う現場からのアイサツが全て今回の戦いの地平と意義を一步も退くことなく賞揚し、そして各現場が更に進んだ地平に向って革命の地下水脈を掘り起し、やがて 巨大な奔流として湧き出んことをアピールする。

獄中から檜森孝雄、永山則夫、富村順一

各同志から追悼と連帯のメッセージ。そして遠くアルジェからアラブ赤軍代表のメッセージ、PFLP、PLO各代表部からの集会への国際アピール、来日し惜しくも集會前に日本を離れたパレスチナ解放戦士からのテーブによる声のアピール、我々の戦列が地に潜り、海を越えて拡がりつつあることの大デモンストレーションである。

戦士の実弟や両戦士とともに戦った友人の決意表明が「必ずや彼らに続く」ことを報告し、世界各戦線に向けて送られる英文の集会アピールが拍手で採択された。

集会終了八時五分前。実行委員長は「戦士の魂が今夜の大文字によって送られるのではない。幻影を照らし出す大文字とともにオリオンの三ツ星となって我々の戦いを見つけているだろう」と締めくくった。

（八・一六実行委N）

追

悼

八・一六集会実行委員会事務局
テルアビブ闘争支援委員会

オレたちの友人が死んだ。パレスチナ解放の烈火の中で、銃を手にしたまま。

奴らが驚愕したのは、奴らの反革命国際主義が想像できる「プロレタリア国際主義」を越えたところで起った事件だからだ。

奴らが恐怖したのは、三島由紀夫の消極的な死を、革命のための死がとびこえてしまったからだ。

奴らが、あわてて、イスラエル軍による絶対的な報道管制を敷き、無差別殺戮などというデマゴギーを世界中に流したのは、テルアビブ空港での英雄的な戦闘が、全世界の抑圧されたすべての人民のこころをつなぐ衝撃力をもっていったからだ。

日本のマスコミは、いつせいに「不可解」「狂気」と言っつてわめきたてた、だが本当はわからないのではない、わかるのが恐ろしいだけなのだ。——日本の市民社会の平和となまぬるさの仮面をひきさいてしまうから

だ、帝国主義とシオニストによって流されたパレスチナの民の血と奪われた財産と大地の怨念の深さが、パレスチナ人民のために

に平然と銃を握れる義勇軍戦士たちの大胆さが、そして銃撃にふさわしい砂漠を照りつける太陽の強烈さが。

オレたちのこころにとびこんできたのは、世界革命の雄大さだ。ベトナムで、そして北アイルランドで今日も続けられている戦闘、三里塚や釜崎の人々の苦しみと喜び、すでは、生と死の具体性によって、オレたちにとって想像することが可能だ。

オレたちは、人民のこころを知ることができるが、奴らは、人民に本質を知られないように逃げまわることしかできない。プエルトリコ人が交戦のまきぞえで死んだにしても、ユダヤ人がかつて迫害されてきたにしても、彼らを抑圧し迫害したのは奴らであり、ベトナムを焼土と化したニクソン

や、パレスチナ人を難民キャンプに追いやったダヤンこそがおとしまえをつけてもわばならぬのだ

オレたちは想像することができ、オレたちはどこへでも行くことができる。そしてオレたちは奴らに向けてブツぱなすることができ。

オリオンの三ツ星よ、八・一六まつりの空に輝け！

オリオンの三ツ星よ、いつの日か、奴ららに向けてブツぱなされる銃声が、オマエたちを追悼するのを聞くことがあるだろう。

★追悼集会へのメッセージ

パレスチナ解放機構

同志のみなさん、友人のみなさん、日本のパレスチナ人民支援センターの方々が、八月十六日京都において、テル・アヴィヴで戦死した故二同志のための追悼集会が開催されることを知らせてくれました。私は、P.L.O. (パレスチナ解放機構) を代表して、故二同志の死に深い哀悼の意を表明するとともに、集会参加者ならびにすべての日本人民に対して、われわれが最終的な勝利の日まで日本人民とともに闘い続けることを明らかにするものです。

三名の日本人同志たちによるシオニスト・イスラエルに対する革命的攻撃は、パレスチナ人民およびアラブ人民によって完全に支持されており、また両人民はアメリカ帝国主義、シオニスト・イスラエル、そしてアラブ反動勢力に対する闘争をいっそう鼓舞されています。三名の日本の同志たちは、アメリカ帝国主義とシオニスト・イスラエルがパレスチナ革命を絞殺しようと策動を強化している状況にもかかわらずパレ

スチナ人民の来るべき勝利への確信を強固にしたのです。

同志のみなさん、友人のみなさん、われわれの革命は、帝国主義、新旧の植民地主義および反動勢力に反対する世界革命総体の一部分です。パレスチナ人民は、アメリカ帝国主義と日本帝国主義に反対する日本人民の闘争を全面的に支持しています。日本帝国主義は自衛隊増強を中止し、沖縄派兵をとり止めるべきです。このような日本の支配階級の態度は中国、朝鮮、ヴェトナム人民、そして世界の全ての革命勢力に敵対している、とわれわれは考えています。

親愛なる日本のみなさん、

われわれが入手した情報によれば、シオニストはわが岡本公三同志に対し、パレスチナ人民に行なったのと同じ拷問を加えました。そして、軍事法廷は無期禁錮刑を宣告し、同時にシオニストたちは、パレスチナ人民迫害の事実を隠蔽しつつ、この判決

が「ユダヤ人の寛容」なるものを示している、と世界に宣伝しています。その一方で、シオニストたちは、故ガッサン・カナファ二同志をはじめとしてパレスチナ革命の指導者たちをあらゆる手段を講じて暗殺しようとしているのです。現在のイスラエルのこうした策動に対して、P.L.O. 革命勢力は革命的報復を実現する用意のあることを明らかにしておきます。

最後に、パレスチナ革命とパレスチナ人民は日本人民との連帯をいっそう促進することを希望しています。私は、日本の人民、ことに東京の支援センターの方々が継続的な物質援助を下さっていることに対し、心からの感謝の意を表明するとともに、支援運動の拡大を希望するものです。そしてまた、われわれは、世界革命と一致する日本人民の闘争に対するわれわれの義務を遂行する用意があります。

どうか、われわれの友情を連帯の挨拶をお受け下さい。

故奥平・安田両同志哀悼！
パレスチナ革命万歳！
パレスチナの民主主義国家万歳！

日本人民とパレスチナ人民との連帯万歳！

PLO議長、常任司令委員会幹部

ヤセル・アラファト

★追悼集会への挨拶

パレスチナ解放人民戦線

親愛なる日本の同志のみなさん、
世界革命へのコミットメントの表現としてパレスチナ人民のために殉死した同志たち、すなわち奥平（バツサム）、安田（サラハ）を追悼する京都集会をあなた方がとり行なっているこの歴史的機会に際して、私は、PFLPの名において、あなた方に戦闘的な挨拶を送るものです。

親愛なる同志のみなさん

われわれは帝国主義・世界シオニズムやアラブ反動といった反動的・ファッショ的な付属物一切を伴うに對する闘争の単一性のみならず運命の統一性によっても相互に結びつけられています。この同志的な紐帯に加えて、一九七二年五月三十日のロッド空港における「ディア・ヤシン」作戦での奥平・安田同志の殉死とともに一層の強化がもたらされました。彼らの殉死は、プロ

レタリア国際主義の崇高な理想、つまり全世界で解放と社会主義をめざして闘っている革命家を結び付ける理想を強調し、強化するに至りました。

二名の殉死者の血は、人民武装闘争の道程を導き、世界革命の革命的分遣隊の統合を更に推進し、強化する方向にわれわれを導く烽火となるでしょう。

われわれは、あなたがたの光栄ある集会に参加できないことを極めて残念に思います。しかしながらわれわれは、このメッセージを通じて、日本の大衆および革命的勢力に對し、PFLPの全てのメンバーが二名の英雄的殉死者に對して抱えている深い愛情と尊敬の念を保証するものです。われわれは、これらの殉死した英雄を産み出し、また、彼らの殉死を追悼し、これら二戦士の、崇高な革命的動機にケチをつけようと

した帝国主義的・資本主義的・排外主義的プロバガンダを非難して立ち上がっている日本の大衆に對し大いなる賞讃の辞を呈するものです。

PFLPの内部においてわれわれは、わが戦士たちと日本の闘士とを結び付ける一連の殉死を誇りに思っています。われわれは、囚われの闘士、岡本同志を誇りに思っています。

これらの三名の同志および進歩的な日本の大衆に對するわれわれの態度を表明するのに、全世界のあらゆる革命勢力、とりわけ帝国主義とその反動的・ファッショ的の付属物に對して大打撃を加えているインドシナの英雄的人民の前にわれわれの誓いを新たにすること以上によいものはありません。

抑圧された階級および人民の勝利が達成

され、そして人間による人間の収奪がこの世界から根絶されるまで、われわれはいかなる犠牲をも物ともせず闘争を推進することを明らかにします。

われわれはこの場を借りて、戦闘的な英雄たち——帝国主義的・資本主義的なテマゴギーに断乎として對抗している——が活動していた京都大学における革命的運動に敬意を表したい。京都大学の学生たちが帝国主義的・反動的・ブルジョア的プロバガンダを完全に拒否することの表現として奥

平・安田同志の写真を大学の門（時計塔）に高々と掲げたことを、われわれは常に想い起こすでしょう。

親愛なる同志のみなさん、

われわれの共通した闘争の道程は、いかなる困難があろうとも、革命家たちの決意とともに進むことを確信していただきたい。われわれは、わが殉死者たちの血によってこの道程の渴きをいやし続けるのです。先月のガッサン・カナファール同志、そしてアガザにおける指導的同志の一人であったア

ーマドゥ・オムラン同志の殉死はわれわれの闘いを続ける決意を示す例ではないのです。

世界の革命勢力の間の同志的プロレタリア国際主義万歳、

抑圧された階級ならびに人民の闘争万歳、

インド・シナ人民の解放闘争に勝利を、

人類の敵に死を、

革命闘争の殉死者に栄光あれ。

★遠い戦場より

アラブ赤軍・重信房子

日本の同志、友人たち、
革命の松明が、この集会に結集したすべての同志、友人たちの炎となつて、燃えつけているのを、遠い戦場から確信する時、私の革命の情熱は、更に赤く、更に深く、日本の同志たちと一体に燃え続けています。隊伍を整え、共に進もう。帝国主義者をこの炎の中にたたき込み、焼きつくし、我々の広野を打ち開こう。

シオニストのテロルが、テルアビブ闘争後、PFLPの同志を殺害し、傷つけている。我々は、帝国主義者に教えてやらなければならぬ。次は、お前たちの番だ。敵のテロルは、我々の隊伍を益々強化し、我々の革命を養っているだけだということを幾度でも、武装闘争で答えてやる。革命闘争は、勝利まで決して消滅しないし、革命戦争は、世界の姿を一つにつなぐ唯一の術である。パレスチナの同志たちは、赤軍三戦

士の闘いの隊伍となつて深く、スクラムを組んで進撃している。
共通の敵に向かって、我々が遠い戦場から進撃する時、革命の松明を高々とかがけた日本の同志たちが、我々と同じ様に立ち、世界の戦場を一つに結ぶために進撃するのがみえる。我々の敵は一つだし、我々の味方は団結しつづける。
日本の同志たち、友人たちがそうである様に、我々も、困難を闘いのエネルギーと

化し、共に進むことをちかう。私はいつも、ここに居るし、あなたたちは、いつも私のとなり居る。私は革命戦争の一戦士であることの幸福感と榮譽をはっきりと知ったし、次にむけて進んでいるはちきれそうな情熱をこの集會に結集したすべての同志たち

ちにわかち合つてほしいと思う。
三戦士の英雄的な闘いが、世界の味方をうち固めつつあり、三戦士の英雄的な闘いが、パレスチナフエダインの道しるべとなつて、赤々と燃えている。日本の同志たちに限りない求愛と、限りない挑戦を込めて、

旅立った三戦士の意志を深く継承し、共に歩き続けよう。
日本の同志、友人たちよ！
八月十六日集會にむけて
遠い戦場より

★革命一戦士追悼にむけて

奥平純三

一九七二年五月三十一日は、我々にとって忘れることのできない日となった。三人の革命戦士は歴史を記す巨大な石版の上にギリギリと深い爪跡を刻み込み、革命と反革命の姿を明らかにすることによって現代の本質を白日の下に晒し、既に開始されておりやがて全面的に本格化するであろう革命戦争を具現することによって未来を象徴した。ここに我々は、はっきりと「我等の時代」を知るのである。

三人の「現代の英雄」達は、自ら意図した通りその行為を通して、世界が正に一元化しつつあるが故に空間的な普遍性を、そしてその未来との関係の故に時間的な普遍性を獲得した。その行為を通じて、過去幾

多の人間達が実際に流した、或いは流そうとして流しきれなかった血と汗を、凝集し暴発させ飛躍させ、さらに計り知れぬ巨大なエネルギーを我々に還元したのである。
我々は一時たりとも三人のことを頭の中にはっきりと据えておかずにはいられない。死んだ二人の流した血は、夏の赤々と燃えるアンタレスの光に更なる勢いを与え我々の情熱が冷めるのを許さないだろうし、その澄んだ思いは、凍てつくような冬のシリウスの透徹した青白い光となって我々の意識のすみずみまで隅なく照らし出すだろう。彼等の生は永遠であり死も又永遠である。
歴史は決して繰返さない！

後退することは断じて許されない！
断固として現在の地平は維持しなければならぬ。我々は今まさに同質の為すべきことを十分に為しきれていないことを知り、大きな口をたたくのをやめじつと沈黙に耐えつつ力を充足しよう。常なる自己検証をもって秋に備えよう。このことを以て彼等の行為と死に報いることこそ最良の道だと信じる。

さあ、更に第二の封印を解き放ち、赤き馬と大いなる剣を持つ者を生み出だせ！

★現地からの連帯のあいさつ——日本PFLP医療委員会

日本の闘う兄弟達！

ロッド空港で命をかけて闘った、世界の最も優秀な同志の闘いの勝利をたたえる集會に、ささやかな現地からの連帯のあいさつを送ります。

ここ、南レバノンで人民の医療にたずさわつて、はや一年が過ぎました。毎日のように、山と難民キャンプを往復するコマンド達にはげまされ、イスラエルの空から、山からの攻撃にも、いつも速攻の反撃と対応を準備している部落の人民にかこまれ、ロッド空港の闘いの勝利の喜びをわかち合えたことを、まず伝えたいと思います。

悪質な日本帝国主義者とジャーナリストは、三戦士の闘いに対して、無差別殺人という、まさに彼らの日毎行っている本質を、彼らの最もおそれる戦士達の代名詞としてつち上げました。

帝国主義者と、彼らを恐れるプチブル反動政権は、みごとにその本質を現わし、イスラエルと和解し、平和共存しようとし、

言動を左右させています。エジプト政府の最近の政策は、ますますパレスチナの闘う人々と、エジプトをはじめとするアラブ諸国の人民の反撥を買っています。

ブルジョアジャーナリズムの目に見えない地の根底で、畑仕事を共にしながら、巡回診療の中に全ての被抑圧者の流す汗と血の中で、人民の眞の革命は育っています。

如何に世界を支配していると豪語するアメリカを先頭とした帝国主義者、サイオニストがデマを流そうと、祖国を追われた人民の血潮に流れるいかりは、世界の抑圧された人民の心を、その闘う肉体を結合し、日々巨大な飛行機と、戦車と無差別な人民殺害、子女虐殺の前に、着々と闘う陣型を整えています。

南レバノンの貧民達は、良く知っています。イスラエルに住むパレスチナ人と、国籍を持たない「ユダヤ」移民達は知っています。如何にサイオニストが人民を虐殺し、無

差別逮捕し、無差別攻撃しているのか、いったいイスラエルという国が、眞に認められるのかどうか。

戦後、ソ連、米国の国連政策の中で、闘う人民達を、新植民地主義で再編成していった世界の平和共存政策の、最も黒い地図は、今や赤い血で色どられています。

先日、レバノンの貧農が、コマンドを助けたといつて、レバノン政府に逮捕されて行きました。レバノンの貧農は、イスラエルの空撃とタンクで家を焼き打ちされ、なおレバノン政府にひっぱられていくのです。

彼らがパレスチナの闘う人民と結合しつつあることは明白です。

そして、全ての国で、帝国主義者と反動政権が、反革命の結合をすればする程、人民は、より固い絆を作っています。

日本の闘う兄弟達、はじめて日本で、パレスチナ革命に連帯する集會が持たれたことを、全てのPFLPの兄弟達と、レバノ

ンの人民に伝えたいと思います。

三人の尊い革命的犠牲の精神は、我々日本人の生んだ、偉大な革命戦士の魂です。パレスチナ人民のその闘いの中でも、一段と映えある栄光と賛美と教訓、はげましを与えた彼らの戦士としての全人格、全魂は、子供から老人までに、世界革命の生々しい現実を焼きつけました。

私達のささやかな部落の診療活動ですらも、この日本人戦士の闘いの精神の一部として受けられる栄光に輝いています。

世界の到るところで、どんなに小さな灯であろうとも、その燃えつつある革命の魂のひびきと共鳴する闘う戦士達は、明らかに既成の党の権威を必要とせず、自らの輪を広げ、闘いの輪を厚く、広く形成してい

くでしょう。

たとえ私達の活動が、小さな傷口や、つかれた人民の寄生虫病を治すという平和な仕事であるにせよ、日毎市民、難民として生きている全てのパレスチナの人々、そして医者もなく、バスもない山村に生きるアラブの貧民達が、日本の戦士をたたえるのと同じように、私に感謝のことばと、そして「我々も日本に行つて闘う、世界のどこへでも、あなたといっしょに行こう」と真剣に語ってくれます。

国境を越えた意識は、ことばの壁をこえ、日毎の生活の中で、否応なしに共に泣き、共にいかり、十年の計をもった闘いに、小さな、けれども赤いほのおをともして行くことでしょう。

★獄中から寄せられたメッセージ

世界革命戦争万歳

松森孝雄

(警視庁在監)

世界革命戦争万歳

武装闘争は文字どおり現実である。

もっとも抑圧された人民の帝国主義者に対する復讐の闘いを組織せよ!

私は、バールム・サラハ・オリード、そして岡本とともに歩む。

世界赤軍兵士 ユーセフ

三戦士バンザイ

富村順一

(東拘在監)

粗末なブロック家のコマンドの寝室の壁に、奥平、安田、岡本戦士の新聞切り抜き写真が、そしてガッサン、カナファアニの顔写真が並べられたこのキャンプの朝は、文字通り、世界革命の核となる思想性を獲得した戦士達の無言の連帯のほほえみ、無心の子供の朝の握手で始まろうとしています。

我々の日本の闘いの質を継ぎさせ、広げパレスチナ人民の闘いを強めて行くことの喜びを、三戦士の哀悼の言葉にして、今日の仕事に急ぎます。

ロッド空港闘争勝利万歳!!

世界革命戦士よ安らかにねむれ!!

一九七二年八月十日

本日テルアビブ空港決死隊、戦士の追悼集会が行なわれることを連絡受けまして、小生タワー事件被告沖繩出身、富村順一は、現在獄中であり、皆様と共に追悼集会に参加することが不可能にて、せめても、文面にて、追悼集会に参加したく、只今ペンを取っている次第です。

まず我々は、本日の追悼集会で、涙を流してはいけません。戦士した奥平君安田君、不当裁判を受けた岡本君に、よくぞ、三戦士が、パレスチナ人民の為に決死隊として、テルアビブ空港に参上して、イスラエル帝国主義に大々的な打撃をあたえ、日本出身革命兵士の革命精神を全世界人民に示したとバンザイをさげば本日の集会が行なわれる事を小生は東京拘留所で期待する者です。

三戦士の攻撃が如何に正当であり、我々も三戦士に学びパレスチナ人民はイスラエル帝国主義者に何をされたか。二百万パレスチナ難民と共に過去をふり返って、三戦士の行為に拍手を送るべきです。世界の帝国主義者どもは、自己の野心から今日まで多くの人民を殺害したことは、すでに歴史の示すところです。故に我々の闘いは、基本的な生活権を守る闘争でもあり、同時に

帝国主義者への、報復でもあります。日本の司法権は岡本氏が帰国した時は、日本に裁判権があるとぬかして居るが、司法権は法の番人でなく、天皇を中心にした、日本帝国主義者の番人です。そのことを明確に示しているのが、今度の岡本裁判であります。小生は沖繩戦で多くの朝鮮人が赤ちゃ

んまで区別なく天皇の軍隊より惨殺されて居ることを存じて居ります。しかもその犯人どもが現在も四国でのう／＼と生活して居ります。そのような極悪人犯でも、天皇軍隊であった時は、職権を乱用して、犯人どもを知らぬふりしてきた今日の裁判官どもが、我々に法うんぬんする権利は全くありません。前後区別のつかぬ文になりましたが、本日の追悼集会は三戦士に拍手を送り、パレスチナ二百難民と共に我々もパレスチナ解放闘争の為に全ての人民と連帯し、戦う決意を確認して、三戦士の追悼会が行なわれることを心より期待いたします。

帝国主義者は自己の野心から、多くの人民を殺害して自己の野心を達成してきた。故に我々も人民解放の為に、帝国主義者に加担する連中を殺しても全く正当です。我々は、帝国主義者の息の根をとめること

勝利であります。三戦士にかぎりない、バンザイを送り、追悼集会の挨拶にかえます。追悼集會参加者へ

ゼンシンノホン

永山則夫

(東拘在監)

ハルカトオクパレスチナノチニテエイウテキセンシヨサレタオクダイラ、ヤスタリヨウシニマゴコロカラアイトウヲササゲマス
サンセンシノタタカイハイマヤセカイカクメイノゼンシンノホシトナツタコトヲツゲマス

ナガヤマノリオ